

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

【氏名】西村邦行

【所属】(助成決定時)京都大学大学院・法学研究科

【研究題目】ガバナンス論の起源—レナード・ウルフの秩序構想

【研究の目的】

国内の政治における地方自治のあり方から、企業の経営管理、あるいはグローバルな場面における法制度の構築まで、今日、社会の統治をめぐるありとあらゆる分野で耳にするガバナンスの語であるが、その具体的な内容には常に曖昧さがつきまどってきた。こうした事情を受けて、本研究では、ガバナンス概念の思想的基盤を明確にすることを目指し、その初期の提唱者の一人である20世紀イギリスの知識人レナード・ウルフの国際秩序観に改めて光を当てることを試みた。そしてそこから、これまで必ずしも十分に研究がなされてきているとは言い難いウルフの思想像解明それ自体にも貢献を加えること、近年進展の著しい国際政治学史の書き換えを推進すること、さらには、ガバナンスという概念を軸に国際政治学と他の社会科学領域との対話を促すことをも試みた。

【研究の内容・方法】

本研究はウルフの全体像解明作業の一部として行われたものであり、助成期間中は、『国際政府 (International Government)』(1916年)へと至るウルフ初期の思想形成過程の追跡が課題とされた。具体的には、20世紀初頭にケンブリッジ大学を出たウルフが、大英帝国の植民地インドで約10年に渡り行政官を務めた後、徐々に活発に取り組んでいった社会・政治評論活動を検討の対象とした。特に注目したのは、左派の知識人集団フェビアン協会の会誌や知識人向けの高級紙 Nation に掲載された、企業の労使関係をめぐる科学的管理法についての諸論考である。その上で、ここに見られる社会・集団秩序に関する議論と、国際社会の統治について論じた名著『国際政府』との関係を、その連続性に着目する形で考察した。

作業の大半は、上に挙げた論文・書籍のテキストの解釈であったが、先立って、資料の収集と整理を行った。当初この作業は、国内の大学図書館の相互利用により取得可能なもの以外については、英国王立図書館へ赴いて実施する予定であったが、研究の過程において必要な資料の書誌情報がほぼ完全に確認されたことから、効率性と費用にも鑑みて、同図書館からインターネットを通じて取寄せる方法に切り替えた(この変更にあたっては、財団からの許可を得た)。その上で、これら評論を第一次世界大戦終了時までには書かれたものを中心として時系列に沿って読み解き、同時に、関連があると思われる評論については、より後の時代のものについても一定程度目を通した。

なお、所属大学の移転に伴い、参加を予定していた2012年3月末日の研究会には欠席を余議なくされ、成果を口頭で発表する機会は得られなかった。そこで助成年度中は公刊論文のみを行い、ちょうど執筆と前後して比較文明学会から関連テーマでの論文の依頼を受けたため、同学会の会誌『比較文明』を投稿先とした。また、本研究の直接の成果ではないが、本研究の前提を成す E・H・カーについての研究を書籍として刊行し、その中にも本研究の知見の一部を反映させることができた。

【結論・考察】

今回中心的に考察したウルフ初期の科学的管理論においては、技術の適切な運用は個人の教科によって為されうるという理性への強い信頼、そのような啓蒙された個人によって社会は漸進していくという進歩主義が確認された。また、この立場を同時代の文化史的・社会史的な文脈に照らしてみた場合、そこにはパターンリズムの強制という帝国主義に特徴的な態度が認められた。そして、『国際政府』におけるウルフの国際政治理論もまた、こうした合理主義的な理想に基づく文明意識が反映されていた。ウルフにとって、工場内の科学的な管理＝ガバナンスと潜在的に対立しあう国家間の関係の管理＝ガバナンスとは、ともに技術の問題としてとらえられていたのである。ここに見られる近代社会観、社会民主主義的な政治的立場、帝国主義的な文明観の間からは、ガバナンスに関わるような学全般を、より広い文明論的な視点との各々の接点から捉えなおす可能性が透けて見える。